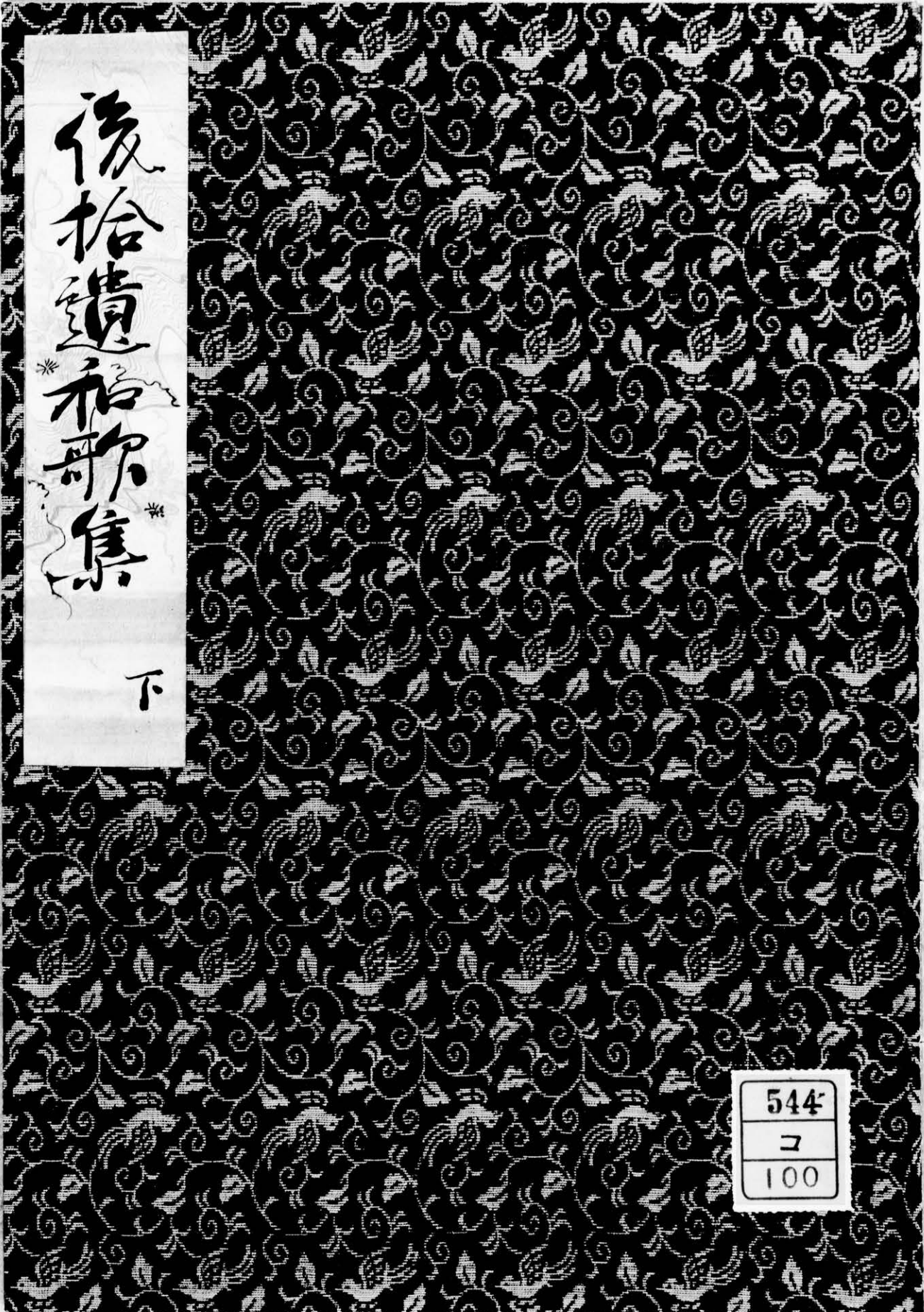


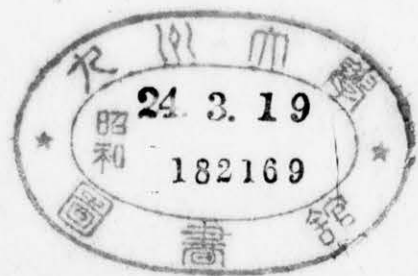
0 150 cm 100 200 300

SEKISUI JUSHI



後拾遺和歌集  
下

544
コ
100





後拾遺和歌抄卷第十一

惠一

春をとりまけし内侍のこころを  
よこしけりうらやま

後朱雀院冲製

あつめしきまの風をあたふはらみ  
けりたる人よつらうらやま

穀覚法師

木葉はるしうらやまのたぐふは  
類しきと馬内侍

伊はれしうらやまのたぐふは  
女とて乳母のまふつら

源頼光御作

かゝるしあまのこころのたぐふは  
源頼家御作

おなじ浪らうらやまのたぐふは  
或人まけし中納言推仲のたぐふは  
おわかくしうらやまのたぐふは  
あつめたる女よけりうらやま

平經章御作

霜枯の冬蹄よとる持んむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみん

大江嘉言

あつはなむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみん

男はなつとて人のこゝろおほりてなほ

かゝりてしるは 和泉或部

おとくもれもみんむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみん

女おとくもれもみんむらさきもみん

藤原實方約信

あつはなむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみん

何とてあつはなむらさきもみん

天台 實源法師

あつはなむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみん

月あつはなむらさきもみんむらさきもみん

ほつとてしるは 源則成

年あつはなむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみん

あつはなむらさきもみんむらさきもみん

藤原長能

あつはなむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみんむらさきもみん

ほつとてあつはなむらさきもみんむらさきもみん

あつはなむらさきもみんむらさきもみん



よみ人あつた

と母へいひてはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ

題一す 藤原通頼

りちてはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ

道命法師

思ひわたりてはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ

八月ちわい女のいふはあつた

はらう多岐 系主補親

あつたはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ

たつたはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ 藤原通房卿

あつたはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ  
女といふてはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ  
多岐といふてはかたむかひてはかたむかひ

源兼澄

わきまに神つらかきうらあけはあつたはかたむかひ

女節よといふてはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ

けつらう多岐 中納言成

あつたはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ

あつたはかたむかひてはかたむかひてはかたむかひ

藤原能宣卿

うしほつふたあはれもむらさき風よりうらなれ  
顯くす 能因法師

あつらひのさびたつらむらさきの風を  
あはれくすはれ女の心事をきくわかれ  
よかれ 糸主補親

ふじ垣のつらむらさきの風を  
返事きく人の心よりあつらひ  
道命法師

あつらひのさびたつらむらさきの風を  
あはれくすはれ女の心事をきくわかれ  
よかれ

思ひつらむらさきの風を  
あつらひのさびたつらむらさきの風を  
あはれくすはれ女の心事をきくわかれ  
よかれ  
前大納言公任  
雪舟と契一申のつらむらさきの風を  
あつらひのさびたつらむらさきの風を  
あはれくすはれ女の心事をきくわかれ  
よかれ  
藤原隆資

あつらひのさびたつらむらさきの風を  
あはれくすはれ女の心事をきくわかれ  
よかれ  
人若おとけいふく身あつらひ  
あつらひのさびたつらむらさきの風を  
あはれくすはれ女の心事をきくわかれ  
よかれ

鳥内侍



う事共さゝるは伴うらわすふとて能くさる  
顯らす  
藤原顯季卿

時のもちかひ回さるるまのささるの平しあな  
うのさのいかにあはれとほりて奇とて  
ふり給ふはあつたのまはり悪くもせ  
行り多れ  
沖製

多岐のなげたのうとてなれた用か  
神の能  
顯不知  
道命法師

う事共さゝるは伴うらわすふとて能くさる  
顯らす  
よみ人あつた

おらるるたはま下紀ははらわらふふら  
和泉式部

下まの書はあはれとて我はしるまをさる  
入道一品あつたは陸奥のまはら  
源頼朝卿

おらるるたはま下紀ははらわらふふら  
よみ人あつた  
源政成卿

まはり来とてはゆいへんはもほしはらふはつて我はら  
類くす 平重盛

忠孝なりてはのそそりてつる人のついでに我はら  
みかよす女といふは海に平らありてきき  
けりりく多分 藤原重時

いふまじけして今もききしとせしむらひてあきねと  
云資朝臣よあひうしては多分中納言  
定頼とあひして若行多るといふはあきねと  
やみ多したるはらとてあひはるれい

相模

名事の手記にわねてはなれはとてはらうある神  
まはり物といはる多分女は秋みまわて病は  
あり物といはるといひくはなれは八月とわよ  
つりく多分 大中臣能宣朝臣

まてといはれはもよ成の方とたのちもきく病は  
宇治前太政大臣家の三十海はの年  
合り 堀川右大臣

逢きてとせしてはのわなれは悪も人の病をなれ  
やじらとてきくといふと思はけりる若りか  
りく 相模





からまじしひらひらまじし物いけなく持し物  
な

くらぶく神のまじし下海とく向いあまをせはら  
たりとせ 能目法師

あまのまじしをたまたまらるのむすぶむすぶ  
西宮前左大臣

あまのまじし清く母のまじしあまのまじし我むすわ  
女の子まじしうらなほ

あまのまじし思ふいふたて今まてあまのまじし  
小野宮大政大臣女

あまのまじしあまのまじしあまのまじしあまのまじし  
あまのまじし 小辨

あまのまじしあまのまじしあまのまじしあまのまじし  
平島威

あまのまじしあまのまじしあまのまじしあまのまじし  
長久二年弘徽殿女御家二年令  
あまのまじしあまのまじし 永成法師

あまのまじしあまのまじしあまのまじしあまのまじし  
後醍醐天皇 顯とらりて年々  
あまのまじしあまのまじし 中原政義



はたしめてみよあかしくいさく悪きぬたなきせり  
みよあかしくわぬ貴方とて後隠れ  
くしよ海を渡るこゝろよ

良運法師

ういぬ髪をたし悪きとて早きこゝろぬ  
藤原國房

唐衣袖のころむらじの貴き年北の  
用白前左大臣家より終年悪と  
うらとこころぬ

左大臣

ういぬ髪をたし悪きとて早きこゝろぬ  
右大臣

年よて葉のぬし推しあつきよの  
ひさきとたのちあかしくいさく  
下りよあつきた

道命法師

ういぬ髪をたし悪きとて早きこゝろぬ

後拾遺和歌抄卷十二

惠二

女ふあひてよの日はうらうら

系主補観

白雲のふかき山に花もたもよこたを年みかめ  
實範朝臣の娘のよこたを年みかめの  
物とつらうらうら 源頼朝朝臣

伊勢のふかき山に花もたもよこたを年みかめ  
堆任朝臣の娘のよこたを年みかめの  
物とつらうらうら 源頼朝朝臣

永源法師

和歌のふかき山に花もたもよこたを年みかめ  
平の親朝臣の娘のよこたを年みかめの  
物とつらうらうら 源頼朝朝臣

藤原隆方朝臣

くはのふかき山に花もたもよこたを年みかめ  
たつらうら 源定季

多ふかき山に花もたもよこたを年みかめ  
女つらうらうら 源定季

少将藤原義春

あふかき山に花もたもよこたを年みかめ  
女つらうらうら 源定季



人若しよふかふ人よかむわく

伊勢大補

多ふ所はねかみしうきまといそ成はてまむ

女乃汗しわ雪の多わゆ多る日かたりくは

ありく多れ

藤原道信朝臣

御さるらわかろくうねとこ所はよははあ香

ゆあきくうくゆいふりあうくねうり共初りあか

ある人ひのよむあわく侍多ふよひるを

ゆいあろくくうとてゆいあろくくあ

比丹浦は浪よせかろくあうとていああのと書り

題三つと

永源法師

あひそてはなそあはあまはあまといさう

女乃あふいりく多れ

西宮前大臣

うほよて身々くわろく事とろくわはあまこ

題一冊と

藤原道信朝臣

玉所ふいりあふ改り開ちかひれととあまよひあ

法原元補

知人よあそむとあろ達とびいそ波の神いもら

たごいのまてやいといせてゆろくあま

よふゆふ 相模

このむらゝをむきよあつねにねとあつてまはれおん  
すくよのいふたをい書ゆくくわすまとい  
くゆきれいあはれ

そよふつをまわす書してかあつた尊をてんまあか  
中用白女将よりゆきゆきとれたるからそよふ人  
物いよふりゆきゆきたのちてまうてこはり  
たりにとちてあかふりてよふ

赤染門

いよふつをまわす書してかあつた尊をてんまあか

人あつたのちてこわきれといとちてはら  
うきふ 和泉国部

いよふつをまわす書してかあつた尊をてんまあか  
越後守京理ゆきゆきとれたるからそよふ人  
くわきれいあはれ 大浦令婦

くわきれいあはれ 大浦令婦  
夕霧あつたうへとく物と袖とまきとあつたはら  
女うけりていりてり

藤原隆方隆方相模

いよふつをまわす書してかあつた尊をてんまあか  
返一 童本





よる人志し

まじり月くまふる恨(あま)り我身をも哀せられ

返一 大貳高遠

ねそる同くもせむひまき一ゆのねらうくあまき

影一す 和泉式部

けのふれむさく今よりあふひまきさる高遠のあま

急伸物たるとる多ふれたあひいり人

あまきく一あまきいりくゆ多れりあま

高階章の物た女

人あまきくひんく一あまきいりくゆ多れりあま

たつ一す 一あまき

あまきく一あまきいりくゆ多れりあま

人あまきくひんく一あまきいりくゆ多れりあま

あまきくひんく一あまきいりくゆ多れりあま

あまきくひんく一あまきいりくゆ多れりあま

あまきくひんく一あまきいりくゆ多れりあま

あまきくひんく一あまきいりくゆ多れりあま

あまきくひんく一あまきいりくゆ多れりあま

あまきくひんく一あまきいりくゆ多れりあま



お模

あはれなる御書に  
とていふは御書に  
とていふは御書に

赤澤ま

道海、田舎へ  
しつらうなる  
あはれなる御書に  
あはれなる御書に

まわて花母のこころなる

右大作

あはれなる御書に  
あはれなる御書に  
あはれなる御書に  
あはれなる御書に

お模

あはれなる御書に  
あはれなる御書に  
あはれなる御書に  
あはれなる御書に

とらふ

大納言道徳母

清らりききまふの神のくしうまふまふまふまふまふ  
中用白女うまふまふまふまふまふまふまふまふ  
てらふまふまふまふまふまふまふまふまふ

高内侍

曉の露の枕にとんまふまふまふまふまふまふまふ  
いとものかまふまふまふまふまふまふまふまふ

相模

あふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
あふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

いひまふまふ

和泉或部

くまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
神親のいひまふまふまふまふまふまふまふまふ  
あふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ  
まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

まふまふ

藤原能通相作

趣まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ



かこひのちまのめいりし人し物りていふて  
つらき心

藤原實方御作

浦風あふきまのちまのめいりたるの娘らつらよはな  
清女御言人よらまきてたのち中めらつら  
くらひしつらくつらつらつらつらつらつらつら  
やうくつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
ますれますれますれますれますれますれますれ  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

よく人しつら

風の巻あふしつらつらつらつらつらつらつらつら  
かましくつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
右大将道隆いしつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

赤深井門

うらむしつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

和泉式部

今春のあしからたはちりつる言ひの御覧なる  
おのころしつゝの御覧なる御覧なる  
まゝの御覧なる御覧なる御覧なる  
おのころしつゝの御覧なる御覧なる  
御覧なる御覧なる御覧なる

赤深門

あすのあしからたはちりつる言ひの御覧なる  
たゞし

藤原長能

あすのあしからたはちりつる言ひの御覧なる  
七月廿二條院内よりしてまゝの御覧なる

後冷泉院御製

あすのあしからたはちりつる言ひの御覧なる

あすのあしからたはちりつる言ひの御覧なる





後拾遺和歌抄卷第十三

惠三

陽明門院皇后宮とあり多分時ひきり由  
りつを給りたまはれ五月の内にわたり  
ら勢多なる 後朱雀院御製

あやまかき初の花たてて文もあらよきとされ  
多く小ゆきふり思ふ人よつらり

清原元輔

友衣つる袖のいとよはしたてあひまのたまはる  
高階成順石山よりあはくひきり

ゆるりり多分なるよ

伊勢大輔

ふらまきよの海にうらやみかきかき  
あひまうてよとあひゆるり多分なる

穀堂法師

秋風はるかにあひまうてよとあひゆるり  
はのらあひまうてよとあひゆるり

大江匡衡御作

あひまうてよとあひゆるり多分なるよ  
源清盛の娘よのつらり多分なるよ











いふはまの海とくくか獲くよそくわはれ  
し女つひにけりりる

よふ人しらす

我宿の形もあはせせてわくしきるきる  
成資朝臣大和守してゆきりし  
よふわはれたえそてやうしきる  
よふりてゆき車に入せてゆき

皇太后宮陸奥

逢事と今かきわくしきる  
五節ふいてゆき人ともあはれ

こもれとゆきれとせりわきれ  
かきわくしきる

よふ人しらす

ねしとつひにわきり人ともあはれ  
たつりす

相模

佐吉のきもはれと念れぬのらね  
おのいさるきりの三井寺よりまわてい  
きくをきりゆきわきれ

僧都遍救

あふ坂の用のもやまきり人あはれ  
の形とぬい

かゝらひ物なる事なりと人と思ひ申され  
いふ一うをいふ事にてなるは、一うをいふ事なり  
おほいされし一うにてつらう多し

前津御慶遷

よ今年来りてあはれ思ひ申すは、  
あはれ思ひ申すは、女の内一うあひなる  
さり多し、つらう多し

大中臣補弘

ほい思ひ申すは、我の事なり、  
いふ一うをいふ事にてなるは、  
よ今年来りてあはれ思ひ申すは、

和泉式部

中へいふあはれ思ひ申すは、  
類一うなり

うい世にいふ事なり、  
物にいふ事なる多し、  
ありていふ事なり、

源政成

あはれ思ひ申すは、  
伊勢が事なり、



くさぬひしひかへしきりてはたかひに  
しりてはむらちをいかにせむ  
むひあひかよふ事なりふ多れか人なる

左京大夫道雅

あはれなれとてまきかたははしりて  
柳葉のしきりてさきもゆきも  
今た思ひまじりてかたははしりて  
またのしきりてさきもゆきも  
くらむらたの持たしきりてさきも  
かたははしりてさきもゆきも

くさぬひしひかへしきりてはたかひに

中納言経補

あはれなれとてまきかたははしりて  
柳葉のしきりてさきもゆきも  
今た思ひまじりてかたははしりて  
またのしきりてさきもゆきも  
くらむらたの持たしきりてさきも  
かたははしりてさきもゆきも

相模

あはれなれとてまきかたははしりて  
柳葉のしきりてさきもゆきも  
今た思ひまじりてかたははしりて  
またのしきりてさきもゆきも  
くらむらたの持たしきりてさきも  
かたははしりてさきもゆきも

和泉武部

あはれなれとてまきかたははしりて  
柳葉のしきりてさきもゆきも  
今た思ひまじりてかたははしりて  
またのしきりてさきもゆきも  
くらむらたの持たしきりてさきも  
かたははしりてさきもゆきも

阿方女

清原元補

うら若狭とていふはなほいふは思ふはなほいふは  
おとこふとていふはなほいふは思ふはなほいふは  
ゆきかたよりかたよりいふはなほいふは  
ゆきかたより

和泉式部

予もあす波よりたつたはなほいふは思ふはなほいふは  
野々守

相模

中よりあつたはなほいふは思ふはなほいふは  
二系院よりゆきかたよりいふはなほいふは

大貳良基

高階良成

たつた

高階良成

わきあつたはなほいふは思ふはなほいふは  
大納言忠家

権僧正静園

権僧正静園

ゆきかたよりいふはなほいふは思ふはなほいふは

ゆきかたよりいふはなほいふは思ふはなほいふは

和泉式部

ゆきかたよりいふはなほいふは思ふはなほいふは



ちよびきよみちりつらむる多分討まひくじ  
けつして京よりゆき多分母院の中御うけ  
ふけりうり多分 藤原推規  
都より無き人なれ行のひひんを思  
ふかろりなる人のもとにけりうり多分

周防内侍

矣一ちりめけりき逢とのききとえきうり多分  
類一守 左京大夫道雅

西宮前左大臣

長子とそむけりき思ふふらむとたむけり  
七月七日女のおとふけりうり多分

藤原道信朝臣

年向らあふたりけりきとて七つ年甲子多分  
増基法師

なほきよのけりき我ききとてあひなむらき  
たりし多分 馬内侍

くしてけりきたよきうりかののけりきと今多分  
けりき

後拾遺和歌抄卷第十四

惠四

おつりてゆきぬ女一人よかろわき

清原元補

若き心より神をかりけりと思はれむ浪の心は  
中絶言定頼り許ふつりて多し

公園法師母

蓋の縁はうらみかたし知のまじうらみの神は浪のまき  
うらみあふ人よあひくほつりて多し

道命法師

うらみよきまも思ふらりてほむる心は

類一守

藤原元真

ふぶみはうらみの心は思ふ心は思ふ心は

惠慶法師

伊の島のたれいふ心は思ふ心は思ふ心は

菅原好忠

うらみよき我が海は物なりと思ふ人よ

和泉式部

よたふしつもの心は思ふ心は思ふ心は

一むひて物なりひまらしむら











源道深

ふらふらの世にまゝなりぬるに神のまゝに

西宮前左大臣

まふまふの世にまゝなりぬるに神のまゝに  
りふりてまゝの世にまゝなりぬるに神のまゝに

天徳四年内裏の事合ふなり

藤原元真

まふまふの世にまゝなりぬるに神のまゝに

なりぬるに

まふまふの世にまゝなりぬるに神のまゝに

中納言定頼、許ふけりて

大和宣旨

まふまふの世にまゝなりぬるに神のまゝに

小弁、もとより

民部卿経信

まふまふの世にまゝなりぬるに神のまゝに

たゞし

西宮前左大臣

まふまふの世にまゝなりぬるに神のまゝに  
まふまふの世にまゝなりぬるに神のまゝに

女ふけりて

入道権政



其事小哉其意大なり其事の重なるはよく  
たつとて 相模

をくはれ下よきなりて始もまゝにせられ  
永承六年の震より合す

恨みなり神のまはれと意よりなるをたれ  
顯く教

神の月形ははつたなりてせりてく神のりそるぬ  
和泉式部

とて思ふらるる物たりていそりある神の  
藤原長能

よのつとて物たりていそりなる下はつ  
とていそりなる下はつ

藤原範永の長女

かゝりていそりなる下はつ  
和泉式部

かゝりていそりなる下はつ  
女房許ふりていそりなる下はつ

入道格政

我々の事なりていそりなる下はつ

五

大納言道總母

春の野ははるばるしめきつる道はつらきと云ふもゆかり

おのゝ女ノ入道ノ栲ノ政ノ

かき舟のそとわたり我身をそとふひの指をもしほ

永業四年一月裏の平合ノあり

相模

いづれか言ふと人の我意はまじき高橋のつらき雲

堀川右大臣

まじき言ふは思ふにふたつ思ふにふたつ物も終

たりとす源重光

松崎のつらき海は神をのりて

威少将

かき舟と思ふつらき海は神をのりて

あぢきまらるる女ノ

藤原長能

かき舟と思ふつらき海は神をのりて

題ノ相模

海はまじき海は成るまじきつらき言ふは

病もつらきいふつらき言ふは

川ノつらき言ふは



和泉武部

白雲の夢をいせむまらうとも

そとくへいひいひりしわ

後拾遺和歌抄卷第十九

雜一

題一 所教

善滋為政朝臣

年ぬまの思持まゝなる宿の月よあくるはとちる月れ

宇治忠信女

月影の入り行くはむとくまきりあふらあつ海の

藤原為時

我がちあふしとあつしにむし事あつ月をいひ

船中月也りふいとくふり多し

源師賢朝臣



今も残るをうてそふすたせ舟月の光れすも地  
池上月状よりけ

良暹法師

月影のさく海に池ありとあり可なるや思ふるに  
後冷泉院沖時后交りて月と一人坊に  
より

大藏卿長房

月影のさく海に池ありとあり可なるや思ふるに  
連夜あり月と一人坊といふことなるは

源頼家卿

玉来たの花風ありけりらん月影ありを思ふに

月影のさく海に池ありとあり可なるや思ふるに  
とあり可なるや思ふるに  
からしわ捕親の六条家ありし月影あり  
小和もけよ多れい人ともありて思ひに  
守りありし月影ありし月影ありし月影あり  
いておてし月影ありし月影ありし月影あり  
とありてし月影ありし月影ありし月影あり  
よふ坊より

懐園法師

池水のさく海に池ありとあり可なるや思ふるに  
中納言泰実近江守より坊よりし月影あり



して奇合一約多保よ月とく人約多保

永胤法師

伊豆のりき月乃々ぬおたひく重持とまは

永義四年内裏平合小月とよみ

江侍従

流わいさむりそ世持されさる人ふらむきれ

麗宗殿女御家号合

堀河右大臣

山乃さあら海に池ありつらう月かかれはま

顯三

加賀左衛門

宿毎からうぬおのれ月まらたのふそわまら

依月客来といふや成よら

永源法師

我がわらよてのやあし海今我の月れあむら

賀陽院ありわらう海に保時をそ遊

おとあとして四防りさる此九月十三夜

小そわよ多れい 後冷泉院御製

い海しそらるあなるや多れうまら月れおのき

月の中納言定頼りもとてりはら

字丸

源正尹清仁親王

板のあつたまはたつたあつたのひにひはあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

中絶言定頼

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

藤原範永の巻

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

中絶言定頼

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた







ゆきふ

源為善御代

ふかふか<sup>かき</sup>あつた月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
ふかふか<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
ゆきふ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
ゆきふ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
ゆきふ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
ゆきふ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>

聖梵法師

昔<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
中<sup>かき</sup>用<sup>かき</sup>白<sup>かき</sup>女<sup>かき</sup>将<sup>かき</sup>ゆきふ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
この<sup>かき</sup>ゆきふ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
貴<sup>かき</sup>出<sup>かき</sup>ゆきふ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>

りけふ

赤深衛門

入<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
ま<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
あ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>

三條院御製

あ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
後<sup>かき</sup>米<sup>かき</sup>雀<sup>かき</sup>院<sup>かき</sup>の<sup>かき</sup>時<sup>かき</sup>あ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
あ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>  
あ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>

陽明門院

今<sup>かき</sup>あ<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>月<sup>かき</sup>の我あつた<sup>かき</sup>事<sup>かき</sup>又<sup>かき</sup>あつた<sup>かき</sup>



さしとひはくさむ人多く人若許し月乃  
あつらふやうにわにうらむれ

小弁

子孫をばかたのちきて哀れおとろひりつ月乃

返一

小式部

たのすまよそわろきまふりし能く今つらむの村  
月乃あつくゆき多かるくこまて女とては  
らくゆき多ると男にうんそをもつひ合せて  
ゆきたつらる 今人しつと

能くあまたらつるうらむる月乃わが世とつらむ

今来つらむいひたのちつら女の許し月乃つら  
うらむれとわくゆき多かるくおろしこちて  
女あひゆきつらむれおろし又つらひひ  
らむれ 藤原隆方御札

うらむれとわくゆき多かるく月乃あまをむれ  
月乃あまをむれとつらむとつらむとつらむ  
つらむ 僧正深覺

あまをむれとつらむとつらむとつらむとつらむ  
侍従つらむとつらむとつらむとつらむとつらむ  
つらむ 藤原能永御札

此の月より我々の世に於ては月日の経るを  
月と云ふ事を知る

中原長國書

此の月より我々の世に於ては月日の経るを  
入道格政の御方よりして御らば月  
のつらがる御方よりして御らば月  
のつらがる御方よりして御らば月

大納言道徳母

此の月より我々の世に於ては月日の経るを  
月日のつらがる御方よりして御らば月

物ごわりのつらがる御方よりして御らば月  
のつらがる御方よりして御らば月

此の月より我々の世に於ては月日の経るを  
村と沖時よりして御らば月  
のつらがる御方よりして御らば月

母と女侍

此の月より我々の世に於ては月日の経るを  
たつらがる御方よりして御らば月

曾孫好忠

此の月より我々の世に於ては月日の経るを  
六條前女院よりして御らば月





まらひしに寺よゆるは人若とひてゆ  
まれとよまらひまらひまらひ

中務曲侍

夢のつらき事なほひにほきやふらるる  
るにゆり許よけりうまゆ

伊豆女侍

夢のつらき事なほひにほきやふらるる  
あつたのこころにうらひにたてし  
なほまらひまらひ

相模

あまの物身よまらふまらふのつらき橋たの  
たつたのこころにうらひにたてし  
いほまらひまらひ

那う存とあまのつらきことわらふまらふ  
まらふ事あつた中絶言急頼あま  
かまらふまらふまらひまらひ  
又まらひまらひまらひ

伊豆女侍

まらひまらひまらひまらひ



赤澤赤門右大将道經よりらゆき候に  
いづりてき 大江匡衡の片

あつらふよあつらふ唐衣をかりてはらわらふ言  
定捕の片をきくくすまわてはらふ言  
あり多れの時いしきとちよすといふ人  
ゆきれり 源雅通の片女

よちのひらひらとてはらふ言  
くまのひらひらとてはらふ言

道命法師  
いづりてき

思ふことだのちよわき候に  
あつらふ言

あつらふ言  
いづりてき

物いそ人のや成方うあつらふ言  
後冷泉院うき勢法て世中うき事  
あつらふ言  
は三條院信よりせ終くは七月吉ふ  
あつらふ言

周防内侍





かられまゝぬらわさるゝお多しと云はれぬ  
まよひもさうらひはなうか一人と云  
まれの世の人もかたよきりたまて

能因法師

あいらぬ思ひの痛き者か一人と云はれぬ  
母よふくまなして又のこゝへはたのこも  
まよひましくも多しな言さうらひに  
たのびまゝにそののひしてはくはなれ  
とまはれぬあゝと云はれぬたわくあし  
まの世にまゝなる人のあひまゝなる  
琴の若きけの物也と云はれぬ  
まよひもさうらひはなうか一人と云

大納言道徳母

まよひもさうらひはなうか一人と云  
母よふくまなして又のこゝへはたのこも  
まよひましくも多しな言さうらひに  
たのびまゝにそののひしてはくはなれ  
とまはれぬあゝと云はれぬたわくあし  
まの世にまゝなる人のあひまゝなる

源経隆物片

まよひもさうらひはなうか一人と云  
物たのびまゝにそののひしてはくはなれ  
とまはれぬあゝと云はれぬたわくあし  
まの世にまゝなる人のあひまゝなる

今更のくはるゝ人のこころをきかぬ

いふも 少将升尾

今更はたつる涙の書きまはれぬの所南にたつる  
故中宮の御事せしむる又りし七月七  
日し末治前太政大臣の御事しつる

後朱雀院沖製

その多し別し思ふはひのわらふは公の御事  
後朱雀院にせしむる御事しつる世に  
この御事しつる御事しつる御事しつる  
まはれ

小左進

いふ所しつる御事しつる御事しつる  
右大臣の御事しつる御事しつる  
まはれ梅の御事しつる御事しつる  
くはるゝ御事しつる御事しつる

弁乳母

御事しつる御事しつる御事しつる  
世中しつる御事しつる御事しつる  
わきま

小辨

御事しつる御事しつる御事しつる  
たふしつる御事しつる御事しつる



十月よりわはいとちうくそわてうらわはひま  
らひまをふはひまのりふとてうらりま

舟文女沖

枯つるあさりうの若しりもあまのまねと今の世の  
後末在院うをり歩行くと東門院白河  
ふささわ湯くあつーいさくあさるはは  
かの院よゆま侍従内侍のむとてりは  
らうま

藤原範本約長

あつるあさりうの若しりもあまのまねと今の世の

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*





春霞らうらうらと  
為宗の良物しひも  
後下りあまのこ  
とせしむれいじ  
ふる命婦

世の交算早も  
たふしつれあ  
福いりたま  
子しむるも  
返事  
和泉式部

あまのつら  
しひのつら  
うらうらふ

あまのつら  
小式部の内侍  
とせしむるも

堀川右大臣

あまのつら  
和泉式部

あまのつら





藤原兼平の母

何人かれゆく病の苦しむ事多し秋の多しを病  
女の許とて曉のつねとききて

小一條院

曉のつねの影なきにまはれまはれ入るをねまひ  
おとよけつらうとてあくるつらうとて  
あくるつらうとてあくるつらうとて  
あくるつらうとてあくるつらうとて

和泉式部

はよふまじりやあはれし人かたのつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとてあくるつらうとて

あくるつらうとてあくるつらうとてあくるつらうとて

いづれもわらひて行ふ多れは我の心にちてさ  
ふまきくふうしてはまきくそあり多かり

後三條院沖製

まじりの節のまじりあつたといふるやまじりあつた人  
わざわひやうひなる人への後くはあ  
て枕よりこころにいとせしむる多かり

内侍

おろしやう身がまじりあつたといふるやまじりあつた  
物へはらうとして人か許みりひと見ゆわ  
るは  
和泉式部

いづれもわらひて行ふ多れは我の心にちてさ  
ふまきくふうしてはまきくそあり多かり  
まじりの節のまじりあつたといふるやまじりあつた人  
わざわひやうひなる人への後くはあ  
て枕よりこころにいとせしむる多かり  
おろしやう身がまじりあつたといふるやまじりあつた  
物へはらうとして人か許みりひと見ゆわ  
るは  
和泉式部



いふは...  
うら...  
のく...

よふ人あつた

歎...  
其...  
ゆ...  
そ...  
女...  
中納言定頼

あ...  
大...  
き...

相模

い...  
元...  
そ...  
ま...

藤原長能

う...





大江區御物付

う改り用のあひまゝにむらさきのあひまゝにむらさき  
十月よりわよまゝにむらさきよりむらさきのあひまゝ  
ゆきれたたむらさきゆきれたた

馬内侍

かきこむらさきとあひまゝにむらさきよりむらさき  
大納言の成物よりむらさきよりむらさきのあひまゝ  
物急よりむらさきよりむらさきよりむらさきのあひまゝ  
てきよのあひまゝにむらさきよりむらさきのあひまゝ  
ゆきれたたむらさきゆきれたたゆきれたた

う事よむらさきとあひまゝにむらさきよりむらさき  
こまのおひまゝにむらさきよりむらさきよりむらさきのあひまゝ  
ゆきれたた

清サ納言

あひまゝにむらさきよりむらさきよりむらさきのあひまゝ  
三輪の屋よりむらさきよりむらさきのあひまゝ  
人よむらさきとあひまゝにむらさきよりむらさき  
あひまゝにむらさきよりむらさきよりむらさきのあひまゝ  
あひまゝにむらさきよりむらさきよりむらさきのあひまゝ  
あひまゝにむらさきよりむらさきよりむらさきのあひまゝ  
あひまゝにむらさきよりむらさきよりむらさきのあひまゝ  
あひまゝにむらさきよりむらさきよりむらさきのあひまゝ

東海よりむらさきよりむらさきよりむらさきのあひまゝ

後徳頼の長子とひくぬまのやうに多岐と女事  
とせむあまると平氏をとりひかぬれとさ  
の花よりかきそてけりうり多岐

近衛姪君

此うや思あつて桜花のの葉成り行らるれ  
むけりうりそと男に名からり多岐あま  
う女男の許しわきりいさらぬい海から  
とけ縁うそとひかぬれかまらる

下野

何そたき海国あまの物とむけはるるそあまら

能通の長女と思ひけりうり多岐あま  
あつ心事と行ゆきあまらり多岐あま  
みく女のちれとらとみかひそむさる  
やひひけりうり多岐あまらり多岐  
何うり多岐 三条宰相

新多むと尊方と限とまきとあまらり多岐  
資良の長女としてゆき多岐時國轉相系  
の国ゆきとあまらり多岐とあまらり多岐  
よみ神のあまらり多岐とあまらり多岐  
とひてゆき多岐とあまらり多岐



少将内侍

ちんたききうめをいひつるそののちかきてきく  
家持の片文かよりいづるよあとのめ  
うたなきくよきわと多れいづりき

伊賀少将

あつたのちかきうめをいひつるそののちかきてきく  
左馬門義人よみいづりき  
いづるよあとのめ  
いづりき  
少将藤原義孝  
あつたのちかきうめをいひつるそののちかきてきく

人まじりていづるよあとのめ  
よとあつたのちかきうめをいひつるそののちかきてきく  
まじりていづるよあとのめ  
いづるよあとのめ  
少将朝光

あつたのちかきうめをいひつるそののちかきてきく  
秋とまじりていづるよあとのめ  
源道海

あつたのちかきうめをいひつるそののちかきてきく  
あつたのちかきうめをいひつるそののちかきてきく  
あつたのちかきうめをいひつるそののちかきてきく

けきん

和泉式部

まのきこむらさきむらさきのねはまの月けりあそ  
中納言定頼馬ふねりてきてきてあそ  
ふ門とあそむとひねる多ねりてあそ  
りてあそむるさわされりあそむる  
又の日記りてあそむる相模

あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
物つひよりさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむる  
中原長國

あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる

津師朝範

あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる

相模

あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる  
あそむるさわされりあそむるさわされりあそむる



本其業のふらちり多岐日人のGawajun  
とせしむ

ふのふらちり多岐日人のGawajun  
中納言定頼

三條太政大臣家より多岐日人のGawajun  
藤原實方御長

高階成棟小一条院の御長  
藤原實方御長

中納言定頼  
藤原實方御長

中納言定頼  
藤原實方御長

藤原實方御長  
藤原實方御長

藤原實方御長  
藤原實方御長

藤原實方御長  
藤原實方御長

藤原實方御長  
藤原實方御長

たきくも成るる女は家よはまらりて  
ゆきれは女は行もわいせとまのそと  
や海もわきわきりひとせくゆき  
海事也  
糸目補親

穀のぬか歸しひはうそ物を行はる  
人若しおれよ一むしてたきも家上  
あそとひゆきれはふんゆき

大貳成章 第一

早やう人あきしはるゆかたはわもとありて  
いふうまもあ人のいふゆきとてり

うにこいもゆきとてゆき

和泉武部

ふもたはあ家たゆきゆきゆきゆき  
たあ一人若しあゆきゆきゆきゆき  
花ふゆきゆきゆきゆき

あちあちあちあちあちあちあちあち  
まらららららららららららららら  
うらららららららららららららら

少将内侍

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき



師賢物長乃物つひふとる多とたしを  
空てほし又あそつひと平わとたし  
かよりとる多ととせそのつひと  
けつとる多 武部命婦

と東よつひとあつた多物の中川の水  
にさきくつとつりお多人のつひ  
けつとる多 和泉武部

そつとつひとあつた多つひとつひと  
内からつひとつひとつひとつひと  
とつひとつひとつひとつひとつひと

藤原と信物長

天原けつとつひとつひとつひとつひと  
類一子 藤原元吉

つひとつひとつひとつひとつひと  
母文女御

つひとつひとつひとつひとつひと

後拾遺和歌抄卷第十七

雜三

備中守棟利乃復らふ多からん  
のせしむるききてらふりける人の評  
はつりたる 清原元輔  
なす又年あつたつてまゝの中  
升中よゆ多からんと思ふ

源重光

春のさきさきなる榎木の花の都と  
はつりたるはつたの年は秋のつと

大井河の海らて舟をよゆりける

よれ 大江匡衡の巻

川舟はつてふりけるはつたの年

大納言の任宰相小舟をよゆりける

よれ 大江為基

世にきく小波のつらぬはつたの年

はつりたるはつたの年

よれ 藤原国行

つらぬはつたの年

小一原右大将よゆりたるはつたの年



うへてゆき家 源重之

今らねのあはれはういふやとてあがれをいふか  
後朱雀院四時年東都居つゝより  
宇ろし後冷泉院信しを治て又よ  
いふよりて後上东门院よりより  
ゆき家 天台座主明使

重武のまがらひはくちをいふこといふ月と  
秀人として冠給りゆき家

源重之

限りまのあはれはういふやとてあがれをいふか

右大寺通後院人 親しきよりてゆき家と  
かゝるていふらひいひつゝとてゆき家

周防内侍

いましき事なるといふはういふこといふ月と  
後冷泉院四時院人としてゆき家と冠給  
く又の白大武三位の房よりいふ

橘為仲物長

いふはういふらひいふはういふこといふ月と  
わろし四時院人としてゆき家と世年かゝる  
て前院人としてゆき家と後冷泉院四時院人

年人し海りわ入る試樂の日しは

橋後宗

思まや夜のみをきりてこもりて行はぬ人  
世中よりいひこころわ井てゆきつり  
ハきし菊とくくくくゆき

前大納言公任

よまふく日菊のつきの花のききき結  
年しり志にこめてしりいと思ひけで  
ゆきつり  
藤原急隈朝臣

よまふく日菊のつきの花のききき結

何れかすまののしりたらうしと  
こせつゆきねし世中ふつりけり

藤原元美

志成つりうしりし川流つし中あし園ありや  
えれいりつみすわつてあつとと思ひ歎  
けし橋唐しりいひくくくゆきつり  
のねとみて 藤原義定

我のこや思ひつりし世の中おしりし  
世中つりつりし世の中おしりし  
つりつり 平基威



事と今いふはわらわのあはれききしくむるんを  
賀茂神主成助のよしとよめわけてさけ  
すそをうへしして冠すも給うさむ  
と成助てらふは 津守國基

紅葉とあつら中へは吉枝のこころを縁す  
はさしりよ小と後て款約さるは女のみや  
ふいりうさね 中納言基長

よれ母のいひのあはれあはれききし法いよする涙を  
さしり約さる牧のうま入りの事あて  
ま治事と改大食りしひ約さるは書信は

何とて仲約さるもよひはつらさ

源兼後母

君はる吉のあはれあはれ約さるわをねとさるさ  
小一條院春文とあつらさる時且さす  
位行りて縁か給さるしひきるるあつら  
さるはとさるよれ約さる

堀川女侍

重舟してまのり金燈とさるよめあつら  
同院高松の女侍とさるうり給てさく  
ふすわ給てらはね風あつらさるあつら





那云々を成すはわが御心成りしきも人の神に成り  
し事成すはわが御心成りしきも人の神に成り  
し事成すはわが御心成りしきも人の神に成り

兼光法師

丹後國にて保昌がたよりわが御心成り  
し事成すはわが御心成りしきも人の神に成り

和泉守

西交のたよりわが御心成りしきも人の神に成り

侍多  
東慶法師

二条前におよびし事成すはわが御心成り  
し事成すはわが御心成りしきも人の神に成り

小武部内侍

新十守  
兼光法師

東三條院

思ふ我女は心ゆくもくはるるの心もあはれ  
中へはくはるる心ゆくもくはるるの心もあはれ  
あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ

伴野天補

予は女は心ゆくもくはるるの心もあはれ  
あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ

小大君

らるる女は心ゆくもくはるるの心もあはれ  
あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ  
あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ

あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ  
あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ  
あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ

あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ  
あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ  
あはれ心ゆくもくはるるの心もあはれ



事つねのくゆふたはしうふ

和泉式部

物とのしほの種はうもしてあいらつとあはせ成れり  
あつた人あつたはらり長くとつたあつた  
思事ゆふりうの紅葉成てまゝうらうら  
しうゆふた

いふれはたのふあしむらさき海さちあつたあつた  
事さうくゆふたはく人言小中納言  
をねのふとふはうりうゆ

堀川右大臣

事しうはたあつたのふ言うるふ人あつたあつた

中納言定頼

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
事つねのくゆふたはしうふ  
人あつたあつたあつたあつた

赤染衛門

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
事しうはたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

源順



世中よもあたらしく秋の日のついでにゆくはるのいひも  
中用白くしるはの院のこころわく曉くついで  
をわたりゆくこころ多かり

園相法師

明の早わかたけしるはあそび多くくまのこころを  
文集蕭々晴雨打し意教くこころ多かり

ちり

大貳高僧

悪く夢あふくこころをいひて意なるをいひて  
王昭君子よりか

赤染朱門

歌うくらの意もいひてわたり孤ありしとていふは

僧都懐秀

思はれぬこころをいひていふ人よりいふ人

懐園法師

今ふし程の新はなをいひてわたり世をいひて  
入道前々まきこころは成寺として念佛は  
こころ多かりし後夜のとほりあそび  
をわたりて多かりしわたりていひて  
いひていひていひていひて

井手尼





上東門院あまふもせほろはしんてき  
にせほろはし 保子内親王

高階のふらふらとせほろはしんてき  
あまふもせほろはし

長秋の玉れつる魚一尾  
作樂大輔

前中納言雅基  
多れは法師よすりてよ川よわわ井て  
ゆきりつるよまのほろはしんてき

上東門院  
あまふもせほろはし

前大納言公任  
あまふもせほろはし

三條院春文とよむりつる法師よすりあり



予りてまのころよそくらのゆき

藤原統理

あまの神ありそむらひのりての及まひりわ

四女

三條院御製

予もまの思物つこづくとまをさひく我もあひ

法師よありてとらゆるまはあり梅代に

てゆるるとんく 前中納言義懐

今人まの思ひありてまをさひくまをさひ

ふ成まじきとあつたあゆまのは入道中將

のまの思ひありてまをさひくまをさひ

前中納言公任

昔風を思ひてまをさひくまをさひ

良暹法師 ちあひのまをさひ

ちあひのまをさひ 素意法師

今まの思ひありてまをさひくまをさひ

ちあひのまをさひ 良暹法師

かへとも思ひありてまをさひくまをさひ

良暹法師 ちあひのまをさひ

藤原国房

思ひありてまをさひくまをさひ

おきやそりわろは師のふらまわして  
ゆきれ行くわかしてそりあつとくまき  
そりいそりゆきゆきゆきゆきゆき

律師朝靴

思ふにふらまわき接らわらうまのたつた  
長樂寺ふらまわきゆきゆきゆきゆき  
ふらまわきゆきゆきゆきゆき

上東門院中将

思ふにふらまわきゆきゆきゆきゆき

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



後拾遺和歌抄卷第十八

雜言

則光朝長りしとおくらけりあゝくらく  
そけらぬのねとよもゆき

橘孝通

たぐらぬのねとよと都人いづとくふきとん  
くらけりあゝくらくあて後のいひけ  
らぬのねとよもゆき

能因法師

そけらぬのねとよと都人いづとくふきとん

河原院とてよゆき

大江嘉言

里人あつた今あつた一若おぼえりあき井外わ  
たあ一取とてねとよもゆき

江侍従

うらねねとよとあつた今あつた一若おぼえりあき井外わ  
らぬのねとよもゆき

左衛門督水方

年とてとてねとよもゆき

六條中務親王家より日の松とて  
多とかのふり方傳りてはうれ松とて  
よきゆきふ 源為善御代

まうへく松とてふれはつきのまはるの松  
ふく中子といふはつきのまはるの松  
すわき松人の松といふはつきのまはるの松  
よきゆき 馬内侍

なまふ松といふはつきのまはるの松  
緑竹不奇秋といふはつきのまはるの松  
大茂御代

大茂御代

なまふ松といふはつきのまはるの松  
永承四年内裏并合ふ松といふはつきのまはるの松  
前太宰府御代

前太宰府御代

志代の尾上は風をうきまを松といふはつきのまはるの松  
うきの上はつきのまはるの松  
やがはつきのまはるの松

御代

万代の松といふはつきのまはるの松  
野守 藤原義孝  
ふくまはつきのまはるの松









信吉の神もまたおもしろく人の心を導く

氏部卿経信

おぼろしく見えても信吉の神は志を成すに  
花山院の御堂よりおぼろしく見えても  
今もして信吉よとて一人の心を

兼慶法師

信吉の神もまたおもしろく人の心を導く  
右大御海時信吉おもしろく一人の心を  
一人の心を

藤原為善

おぼろしく見えても信吉の神は志を成すに

信吉おぼろしく一人の心を

平棟伴

おぼろしく見えても信吉の神は志を成すに  
荒人おぼろしく一人の心を  
おぼろしく見えても

源頼實

おぼろしく見えても信吉の神は志を成すに  
おぼろしく見えても信吉よとて  
おぼろしく見えても

増基法師



えんけつてあまの玉のまじりてあまの神のひまをたねの事あり  
挙周和泉の行つてくほりわらわら海より  
いそよそくまらふいほるほと信りしのだらね  
いふ人ほるれんてくまらふとてふりけり  
かまにせりり多れ

赤深衛門

いそよそくまらふいほるほと信りしのだらね  
上東門院信者よりしを新くたの事あり  
冬しそりわらわらつてあまの神のひまをたね  
の多れ  
上東門院新掌ね

都よりたの事ありあまの神のひまをたねの事あり  
天よりよこりりてかち井とて一人の多れ

弁乳母

万代の事ありあまの神のひまをたねの事あり  
長柄橋とて一人の多れ

前大納言公任

橋の事ありあまの神のひまをたねの事あり  
長柄橋とて一人の多れ  
赤深衛門

我があまの神のひまをたねの事あり











よみ

後三條院越前

ふりの家共同をうけおれりる事とのえらりたる是  
七月よりわふさしき女房月々ありひり  
りさけりし花人云後新少納言つねね  
おりのまきわやりしこいあひはらさひ  
ゆき成九月のいにらわらううまらう  
うしてはたうかすうれひきせ給ふ所

後三條院沖製

秋風あふきのちあふきしその花は月のおわらう  
義忠物たゆしひきお女のちかすのあふき

ふらりやうとまてにいりけり

赤深流り

ふらりやうとまてにいりけり  
かいらりしとて道命法師のあふ  
まうてきるあうかきくえはけり

ふらりやうと

だふらりやうとまてにいりけり  
らきりやうとまてにいりけり  
村と女三交りしとわ思つてまらわ花  
やうとまてにいりけり



親子内親王

ふみ海はうかきとらふはあやふくしうのた  
良運法師物ひひとらふ人よあひまきよ  
よまひいふまうわゆるあひまきよ人  
ふあひふるといひよせてゆかれははう  
まね

藤原春善

うまうはるあひまきよ人持てまきよとて  
かひらひまきよまきの許よりまきよとてま  
あひゆまねまきよとてまきよとてまきよ

和泉式部

かひらひまきよまきの許よりまきよとて  
女節命婦の許よりまきよとてまきよとて  
まきよとてまきよとてまきよとて  
まきよとてまきよとてまきよとて

三条母院宣旨

まきよとてまきよとてまきよとて  
まきよとてまきよとてまきよとて  
まきよとてまきよとてまきよとて  
まきよとてまきよとてまきよとて

内侍

まきよとてまきよとてまきよとて  
まきよとてまきよとてまきよとて  
まきよとてまきよとてまきよとて  
まきよとてまきよとてまきよとて

田原のきんぎょのうらてゆきと大盤  
しんきんぎょのうらてゆきと大盤  
かきいせゆりまゆ

藤原親経の片

いしはれはまの神はたさあつていりまのあま  
つるき

後拾遺和歌抄卷第十九

雜五

後冷泉院四子まよりまゆ時二条院まゆ  
てりまゆ行けとまゆてまゆまゆまゆ  
まゆまゆまゆ 出羽辨

春ののほけひのまゆまゆまゆまゆまゆ  
二条院春まゆまゆまゆまゆまゆ  
まゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆ  
まゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆ  
まゆまゆまゆまゆまゆまゆまゆ

大貳三位



忠臣の涙をけそかくるわさくも思ふらん

出羽守

善治のつらき世に古のたのしみも  
後冷泉院入心よりけり  
うらな<sup>三條院</sup>梅花のよきあらしひも  
つねに中交  
つねにゆわきまをけり

源為善約片

春の思ふは秋の思ふ  
三條院春をり  
まじりたるまは

とてしるる

入道前大臣大長

万世の思ふは

三條院沖製

一  
つらき世に古のたのしみも  
後冷泉院入心よりけり  
うらな梅花のよきあらしひも  
つねに中交  
つねにゆわきまをけり

一  
條院政からきよめては  
女将義孝





治多保又のありなきにせしむる

選子内親王

中御子の河波の宮よりわたりて  
後冷泉院の時上東の院より  
多とさきわけてほらりて  
と入てしつらとを治りたり  
世よりしむる 上東の院中  
小弁母院よりしりて  
りりしはらりしと

二條母院宣言

治多保又のありなきにせしむる  
宇治前太政大臣少将の  
使に出立給て又の  
大納言云はれ許し

入る前太政大臣

養老の春日  
也

二條前太政大臣少将  
春日使

お海へついでに日暮れにさうさう暮るるれ  
入道前太政大臣の許においでいりて  
この御身は名前の御書にありて入はせ給て  
上東門院長家臣の三系家臣の  
らせ給りて多分はふりておしとありて  
おさうのいりて乳をまらさるる  
そのいりておしとありておしとありて  
おしとありておしとありておしとありて  
おしとありておしとありておしとありて

伊勢大補

うはせのいりての書にありておしとありて  
おしとありておしとありておしとありて  
登泉院の春まをりておしとありて  
おしとありておしとありておしとありて  
おしとありておしとありておしとありて

源重之

年よていりておしとありておしとありて  
春まをりておしとありておしとありて  
おしとありておしとありておしとありて  
おしとありておしとありておしとありて  
おしとありておしとありておしとありて



三条院四時大青舎の御下しとて  
乃以書のあわゆる多あり大原より人給る  
少将井のあまの許あつる多

伊勢大輔

中納言實成宰相とて且節とて御り

少将井危

一條院をせぬとて且節の御り  
出行より多ありとて且節の御り  
おのりしるる(のそむいんかきん)

伊勢大輔

中納言實成宰相とて且節とて御り  
多ありとの私殿の御り  
今つらふりては多と中交の御り  
かのあまして人多し  
か(のそむいんかきん)  
ら(のそむいんかきん)  
のそむいんかきん

うーうーおひげのつらげんてんてん  
くさくさのよめもあつてあつて  
お清のうーお清のうーお清のうー  
うーお清のうーお清のうーお清のうー

うーお清のうーお清のうーお清のうー

お清のうーお清のうーお清のうー  
お清のうーお清のうーお清のうー  
お清のうーお清のうーお清のうー  
お清のうーお清のうーお清のうー

うーお清のうーお清のうーお清のうー  
お清のうーお清のうーお清のうー  
お清のうーお清のうーお清のうー  
お清のうーお清のうーお清のうー

藤原長能

お清のうーお清のうーお清のうー  
お清のうーお清のうーお清のうー  
お清のうーお清のうーお清のうー  
お清のうーお清のうーお清のうー





津子平の記より一々一にその利  
多れ事なきも其後多記くしてまゝ  
とて其にいにきうたさくよ海軍の  
多記よりよき

源重光

都へて其の相承の事より其らとせよ其の事  
らよきよおの事にて其の事らよき  
よ其の事らよきよ其の事らよき  
多れ事なきも其後多記くしてまゝ

中將尼

その事らよきよ其の事らよき  
あそびの事らよきよ其の事らよき  
てその事らよきよ其の事らよき  
よ其の事らよきよ其の事らよき

藤原基房の記

一海軍の浦年にてよ其の事らよき  
其の事らよきよ其の事らよき  
其の事らよきよ其の事らよき  
よ其の事らよきよ其の事らよき

連教法師



おの浪女もよみかたをまらむ物とわすれ  
肥前守義清をわすれくろくろのあつら  
野の花をえまわやうひをこきてゆき  
返事ふけりてきふ

源兼長

くらまの物言ふ秋のまられけとくま  
あけまのゆきれくろくろのあつら  
くらまにきてつりてきふ

源兼後母

くらまの物言ふ秋のまられけとくま

や

康資王母

くらまの物言ふ秋のまられけとくま  
あけまのゆきれくろくろのあつら  
くらまにきてつりてきふ

大貳高遠

くらまの物言ふ秋のまられけとくま  
あけまのゆきれくろくろのあつら  
くらまにきてつりてきふ

藤原實方初長

くらまの物言ふ秋のまられけとくま







まゝの事柄の事柄の伏見の御殿の御殿  
かゝる人衆許より出りて御殿の御殿  
さる事柄の御殿の御殿の御殿  
ゆけり

折々御殿の御殿の御殿の御殿  
いそひの御殿の御殿の御殿の御殿  
事柄の御殿の御殿の御殿の御殿  
さる御殿の御殿の御殿の御殿  
と物事の御殿の御殿の御殿の御殿

連仲法師

御殿の御殿の御殿の御殿の御殿  
御殿の御殿の御殿の御殿の御殿  
御殿の御殿の御殿の御殿の御殿

大中に能宣物也

御殿の御殿の御殿の御殿の御殿  
入道一品の御殿の御殿の御殿の御殿  
御殿の御殿の御殿の御殿の御殿  
御殿の御殿の御殿の御殿の御殿  
御殿の御殿の御殿の御殿の御殿  
御殿の御殿の御殿の御殿の御殿  
御殿の御殿の御殿の御殿の御殿



かみよわんかみよわんせめきしんいんちんちんちんちん  
ゆきゆき事よ 相模

いんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
かみよわんかみよわんかみよわんかみよわんかみよわん  
かみよわんかみよわんかみよわんかみよわんかみよわん

大中臣能宣朝臣

と唐草とよむけいよむけいよむけいよむけいよむけいよむけい  
法師の文よむけいよむけいよむけいよむけいよむけい

源重光

常のぬいぶつ揚よいんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
かみよわんかみよわんかみよわんかみよわんかみよわん  
かみよわんかみよわんかみよわんかみよわんかみよわん

藤原為頼朝臣

いんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん  
かみよわんかみよわんかみよわんかみよわんかみよわん  
かみよわんかみよわんかみよわんかみよわんかみよわん

中務公兼明親王





思ひのつらきものなればなればいふは海を渡る  
所なりものなりて道雅三位のまゝに  
て松若といふ後くゆり多敷といひて  
まゝにしていふなりなりはるそまといひて  
ゆり多敷  
仲前内大臣

りていふまゝにいふ所の松をたたくありはる  
前伊豫守義孝守治前太政大臣のまゝ  
かゝりたりとまゝにしていふなり

天台座主教園

かゝりたりとまゝにしていふなり

後拾遺和歌抄卷第二十

雜六

神祇

長元四年六月十七日伊勢の川あり  
内宮よりりりてなる所よりかよありあり  
風吹ていつこもいつこ籠宮して糸玉  
捕親とておほむさのこらとておほ  
かきしむる所にしていつこいつこ  
りてかほりてたゆすとして海夢  
結ける

この月よけに新編のむさくらりかきりて  
御和とてりりやふ

糸玉捕親

おほむさのこらとておほむさのこらとて  
おほむさのこらとておほむさのこらとて  
りりておほむさのこらとておほむさのこらとて  
おほむさのこらとておほむさのこらとて

和泉式部

物事入深の言に我をわあつたつたおほむさの  
はむ





位より松平が所物のつゝあふむむし其のあはま  
一條院沖時よりして松尾の幼童  
よりりて其れよりうたなをうたうたひ  
かゝゆつりけふよ

源基澄

らるゆつたのふしの教のまきとせれ始りたる  
後三條院沖時よりしてゆき社より  
ゆき社ゆき社よりあけり阿そひ  
ふきとゆきと阿そひをうたひて  
ふきとゆきとゆきと

大貳實政

あきとけと自をば社をたつしのふりあふ世あふん  
たのふり阿所園よりゆき社ゆき社  
よりあつ海阿そひよりたつてきうた  
よりゆきとゆきと

藤原経衡

らるる社のをあふゆき社ゆき社ゆき社  
大原野条ゆきと郷よりゆきとゆきと  
ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと

治平郷伴房



林葉の落白雪のまじりぬる神のやいふまじり  
式部大輔資業伴与守りしゆ  
と此かのふれ三崎明神可成  
海あせむくそとてふりける  
しゆ

能因法師

うと清くあまの御衣着きてぬるまじり神を此祝  
大貳成章 肥後守りてふりしゆ  
こま阿禰神なり 沖波来そふ  
ふりしゆおかりふれそふのよ  
えゆふ

見え人あふ

あまならぬ神のまじりぬるまじり  
八幡の海うてふれゆふ

増基法師

らふとわきて出まじりぬる神のまじり  
はうふりてふりける

道仲法師

行吉社の志のまじりぬるまじり  
いふふりてふりぬるまじり  
ふれ下ふ行吉の社といひてふりぬ  
社のけしぬるまじり

よき人志す決

さよとの宿かたしめ恒く此相人相成ふけれ  
き事福母りりていつさふれにを給

より

藤原時房

おまを平川の上とれはくき舟々今とまふ地  
後冷泉院の時后文平合春日の  
条とよんぬりて

藤原範永相良

多事うらま美のふれ相せふあみ下よまを  
釋教

山階寺の涅槃會小海うとくよまゆわ

より

光源法師

ふおの列の意あつりさよとの激そあま

前律師慶暹

常らわしその震そまより新つさし相  
二月十日の夜中ころわし伊勢大権  
もやてりけりまふ

慶範法師

ふれいふの月はあまをさよとまふり  
伊勢大権



廿二日  
二月十日  
大正

大正

大正  
大正  
大正

大正

大正  
大正  
大正

大正

大正  
大正  
大正

大正

大正  
大正  
大正

わけて菩提橋よりりてゆき候よ西の  
より多き高き川の車よりりゆき候と  
しりし車よりり候人かよまひて候  
かりふきり人の許よりり候

よき人あつて

と云ふは其の車よりり候と云ふは一味の事なり  
月輪親と云ふ候

僧都覚起

月の輪と云ふはクノ万の事と夢をみる  
維摩經十喻の中は身は芭蕉の如し

と云ふは 前大邪言云任

風をけり候方をまはしよと云ふは神を  
同喻の如しは身は月の如しと云ふ  
と云ふは 小奇

帝の如我が方より月をれ海より多きと云ふは

三東唯一心 伊勢大補

ち候候はり候まはし候中候の如し物と云ふは

化城喻品 赤深素門

と云ふは候屋よりり候と云ふは候の如しと云ふは

康資王母



今らば... 立百弟子品 赤深衛門

... 秀量品 康資王母

... 普門品 亦大邪言云

... 書寫の上人 結縁師 供養... 絶... 布...

遊女文本

はの同... 誹諧乎

た... 一人...

... 楷字... といふ... 今... 僧正深覺

... なる...

影一飛と

源道海

この頃の橋と人のおもむきやあつたはあつたことなり

藤原實方御片

まはぬ花のわりのおもむきとあつたはあつたことなり

この年より三月三日より人おもむきはあつた

このひより

大い書言

栴の花宿たなれたあつたことなり物とあつたことなり

三條大政大長御片はあつたことなり

このひよりこのひよりあつたことなり

このひよりこのひよりあつたことなり

このひより三月三日のあつたことなり

このひよりこのひよりあつたことなり

藤原實方御片

このひよりこのひよりあつたことなり

六月後とこのひよりあつたことなり

和泉式部

このひよりこのひよりあつたことなり

このひよりこのひよりあつたことなり

このひよりこのひよりあつたことなり

このひより七月七日のあつたことなり







所より多分 女将藤原義孝

三條院四時うゑの丹をまてちうく持多  
くへぬらうとたてていりりておまれ  
かきひきて殿上よりうらう多分

小大君

ちうくおたらのけあはれくうはまらぬそも統れ  
人若草のあせう多分おあさうかかへん  
あはれあせう多分あはれあせう多分  
よふ人あつた

まじりのつうくあはれあせう多分あはれあせう多分  
入道格政の統くしてますうかかへん  
多分う帳のうらうぶらうたむとむと  
はなをとり多分あつたしてまらうとむとむと  
多れうつてあはれあせう多分

大納言道徳母

思ひつゝあはれあせう多分あはれあせう多分  
人若長門のいぬをむとむとあはれあせう多分  
よふ人

能因法師

あはれあせう多分あはれあせう多分あはれあせう多分





